

【2016 年度第 1 回研究会発表要旨】

島村孝三郎はなぜ服部四郎へアイヌの研究を勧めたか
—戦前戦後の体験者としての考古学者とアイヌ—

若林 和夫

本発表では、1964 年に刊行された『アイヌ語方言辞典』編纂のきっかけを作った島村孝三郎という人物を取り上げ、彼の経歴や戦後の活動について紹介した。島村孝三郎は、東大法学部卒業後台湾統治に関わる植民地官僚などを務め、満鉄に関わり、大連図書館の初代館長を務め、大陸での考古学発掘に尽力した東亜考古学会の幹事を務めた人物である。戦後は考古学協会の評議員を務め、1966 年に 92 歳で亡くなっている (駒井 1966)。

その当時の知識人としての思想や行為の功罪は別として、戦前戦後どのような活動をしたのか、どのような人物であったのか詳細はあまり知られていない。考古学に関わった人物が、『アイヌ語方言辞典』の編纂のきっかけをなぜ作ったのか。服部四郎自身の文からみることにする。

終戦直後のことだった。疎開先の東京都西多摩郡西多摩村小作の文字通りの陋屋一百姓家の蚕室一に、東亜考古学会の島村孝三郎先生がわざわざお見えになって、相変わらずのお元気な様子で、琉球語と朝鮮語とアイヌ語の研究を促進するようにと、熱心にお説きになった。

(服部 1964: 5)

服部は「相変わらずの」と書いており、実はこの続きで「島村先生には昭和 7 年以来懇意にさせていただいており」といい、中国東北、モンゴルへの調査で島村に人脈の紹介などで世話になったことがその著作からわかる (服部 1991)。島村自身はアイヌ語の研究を服部へ勧めたが、単に言語の調査それだけにとどまらなかった。泉靖一の提案で、田村すゞ子、村崎恭子らの育成も行った。基礎語彙調査とはいえアイヌの現在を記録し、服部自身や彼の二人の弟子たちはアイヌとの新たな関係を構築、データを公開する。

戦後金田一京助によると島村は服部とは別に金田一にも詰問していて、文部省の資金を付けてまで、その問いを回答させた。金田一が書くには以下の様な状況である。

今に疑問に捕らわれて居て、新日本歴史の第一ページが書き下ろせないではないか。

この方面に多少でも関係をもつ今日の学徒、この問題を明らかにすることがさしせまつたその責任ではあるまいか。だまつて難問の前に佇立して居るのは怠慢ではないのか。卑怯ではないのか。

島村先生の拍車は念である。自らはからず、起つて筆戦の血祭りに書き下ろすのがこの小考である。

(金田一 1948: 1)

金田一の筆致からかなりの詰問だったことがわかる。「筆戦の血祭り」とはなかなか書

けまい。島村自身、エミシとアイヌの関係性や日本史に影響を与えた存在として考える上で重要な要因という印象を持っていた。現在では少々引用しづらいが、『人道』という雑誌に「民族の研究と文化問題」（島村 1928）という文章を書いている。いわゆる日本とアイヌなどの関わりをその形成から論じ、日本を知るための鏡として、彼はアイヌをどうしても総合的に知りたいと考えていて、戦後によりやくその機会を託すようになる。それを託せる相手として、服部が選ばれた。島村の思いは止まらず、考古学発掘にも熱意をそそぐ（斎藤 1964）。

つまり、島村が服部に調査を勧めたのは、日本人を知るための様々なアプローチのなかの一つであり、人脈を尽くしてアイヌを総合的に知ろうとしたのである。彼の情熱は、日本人の源流を知るといふ強い思いに加え、植民地経験や敗戦から、他の研究者のように日本列島の調査の必要性の認識があったであろう（坂野 2012）。加えて彼の経歴に関する資料が現在でも海外にあり、現地でも電子化が行われている。私たちは今も戦後を背負っている。

なお、調査にあたってヤユツ・ナパイ氏には台湾総督府のデータベースの解説を受けていただき、唐突の問い合わせにも丁寧に対応していただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

金田一京助

1948「蝦夷即アイヌの論：此の一篇を島村孝三郎先生に捧ぐ」『民族学研究』13-1: 1-20.

駒井和愛

1964「モヨロ貝塚の発掘」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻別編(駒井和愛編): 7-19

1966「評議員島村孝三郎翁逝去」『考古学雑誌』52-2: 68.

斎藤 忠

1964「最寄貝塚の調査の沿革」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻別編(駒井和愛編): 1-6.

坂野 徹

2012「九学会連合の共同調査と「国土」」『産業経営プロジェクト報告書（産業振興と地域社会）』35-2: 1-15. 日本大学経済学部産業経営研究所編.

島村孝三郎

1928「民族の研究と文化問題」『人道』275: 12.

服部四郎

1964「序説」『アイヌ語方言辞典』: 5-29. 服部四郎編 岩波書店.

1991『一言語学者の随想』汲古選書 1 汲古書院.

臺灣中央研究院臺灣史研究所「臺灣総督府職員録系統」データベース

<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>

(わかばやし・かずお／北海道民族学会会員)

アイヌ民族とオオカミの関係性 — 『コタン探訪帳』の記述の整理を中心に—

梅木 佳代

本発表は、北海道のアイヌ民族とオオカミの関係性について検討することを目的として行った。北海道にオオカミが生息していた当時、アイヌはオオカミを「カムイ」（神）と

して位置づけることで良好な関係を築き、狩猟・利用の対象にはしていなかったと考えられてきた。しかし、近代以前の文献にはアイヌによるオオカミの狩猟・捕殺に言及する事例も見られる。過去に記された情報と現状の知見の間に齟齬が生じているとすれば、そこにどのような要因が介在するのかを明らかにし、不整合の解消を試みる必要がある。本発表では、アイヌ民族とオオカミの関係性について多くの情報をまとめ、従来の議論に影響を与えてきた更科源蔵の著述に注目した。とくに刊行された文献上の記述と調査段階で残された資料の記載の双方を確認し、著作に反映されなかった情報の有無とその内容を把握することを試みた。

本発表では、更科の著作の中でもオオカミに関するまとまった記述がみられる文献として、1942（昭和17）年の『コタン生物記』[更科源蔵、北方出版社]と、1976（昭和51）年の『コタン生物記Ⅱ野獣・海獣・魚族篇』[更科源蔵・更科光、法政大学出版局]の2件を取りあげた。1942年の『コタン生物記』には、アイヌがオオカミを神格化した理由として「鹿を獲ってくれるため」と「いたずらに対して恐ろしい復讐をする」ことが併記される。また、オオカミを毒矢で射た場合、射られたオオカミの仲間が集まって射た人間を恐ろしい危害の底に突き落とすこと、射られたオオカミ自身も人間に対する仲間の仕打ちにより天へ帰ることができなくなるという因果が説明される。これに対して1976年に刊行された『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』では記述内容が変化する。アイヌがオオカミを神格化した理由は「鹿を獲って人間へ分け与えてくれるため」とされ、オオカミを毒矢で射た場合については射られたオオカミが「他の神々のように復活できない」ことの紹介はあるものの、その理由や経緯には触れていない。

初期の著作では人がオオカミへ危害を加えるとオオカミがそれに対して報復を行い、最終的にどちらも不幸な結果にいたる関係性を示しているが、後期の著作では人とオオカミの関係性において双方が対抗しあう構図は読み取れない。さらに、後者にはアイヌにとってオオカミの皮や肉が価値を持たなかったとする情報が追加されている。こうした情報の増減は、更科が初期の著作を刊行した後もアイヌ民族への聞き取り調査を重ねていたことから、情報更新の結果であった可能性も考えられた。

しかし、弟子屈町図書館が所蔵する「コタン探訪帳」19冊、「コタン探訪日記」1冊（以下『コタン探訪帳』と表記）の調査を行ったところ、調査時に得られた情報を受けた変更ではないと考えられる結果を得た。『コタン探訪帳』は更科源蔵が1950年代から1970年代にかけて行ったアイヌ民族・アイヌ文化に関する調査記録である。この中のオオカミに関わる情報を整理すると、オオカミを「獲る」あるいは「送る」対象としていたとする聞き取りの記録は1960年代になっても追加されていた。一方、オオカミの狩猟を禁じることを明言する例は『コタン探訪帳』中には確認できていない。

更科源蔵がまとめたアイヌ民族とオオカミの関係性、とくにオオカミの狩猟や利用をめぐる部分には、調査で得られた情報が反映されなかった可能性がある。オオカミの狩猟や送り儀礼の存在を知りながら、なぜ著作中に反映しなかったのかという点については検討対象を広げて考察に取り組まなければならない。ただ、この点を考察するためには「北海道内のオオカミを絶滅させたのは誰か」という追及の矛先をそらす意図が存在した可能性も検討する必要があると考える。

北海道に生息したオオカミが人による過度の捕殺圧を受けたために絶滅したことは広く

知られるが、「誰が捕殺に従事したのか」という点に注目される機会は限定的である。その中でも明治時代に布達された有害鳥獣の獲殺を推進する制度に従事せざるを得なかったアイヌ民族の存在があること、その結果として北海道内のオオカミの絶滅にアイヌ民族による狩猟が影響を与えた可能性があることについては研究者による指摘にとどまっている。今後、北海道における人とオオカミの関係性の検討を続けるためには、既存の記述がどこまで実態を反映できているのか、そして発表される情報の取舍選択が社会的な背景や議論と非常に複雑な関係にある可能性を念頭に置いて取り組む必要がある。

(うめき・かよ／北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程)

アイヌ語における空間指示枠について

高橋 靖以

空間指示の表現は言語人類学における基本的な研究課題の一つである。通言語的観点から水平方向の空間指示枠 (frame of reference) には、固有指示枠 (intrinsic frame of reference)、絶対指示枠 (absolute frame of reference)、相対指示枠 (relative frame of reference) の区別があることが知られている。本発表ではアイヌ語における空間指示枠のタイプを概観し、異なる空間指示枠の併用や通時的変化の問題について分析した。その分析結果と考察は以下の通りである。

(1) アイヌ語においては、絶対指示枠と相対指示枠の併用が観察される。これは、特に家屋内での空間指示表現において顕著である。家屋内でこの併用現象がみられるのは、“fire/water” conflationに基づくものであると考えることができる。また、アイヌ語における“fire/water” conflationの存在は、環北太平洋の諸言語との類型論的共通性を例証するものといえる。

(2) アイヌ語地名においては、固有指示枠の使用が基本的であるとされてきた。一方、一部の地域においては、河川名に相対指示枠を用いた例がみられる。この現象は固有指示枠から相対指示枠への通時的変化とみなすことができる。

(たかはし・やすしげ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)